東京女子大学心理学紀要　2005年　創刊号　pp. 37 − 42

〔2003年度　修士論文〕

中学生の死生観　―― 絵本の感想の分析による探索的研究 ――

今　野　公美子

問題と目的

近年、子どもに生と死について教えたり考えさせたりすることの重要性が指摘され、小中学校、高校など教育現場では「デス・エデュケーション（死への準備教育、生と死の教育）」に関心が高まっている。その理由として、児童生徒の関わる殺傷事件や「いじめ」による自殺などが注目されるようになったこと、科学技術の進歩に伴い脳死臓器移植や遺伝子治療など生命倫理に関わる問題が身近になってきていることなどが考えられる。近代化に伴って死が身近な生活から遠ざかったため、死について意識することが少なくなったということもよく指摘されている（デーケン、1986；丹下、1995など）。もちろん、このような今日的なトピックスだけがデス・エデュケーションの意義ではなく、生と死は普遍的なテーマである。

しかし、デス・エデュケーションの実践報告は多いものの、その前提となる「子どもが死をどうとらえているか」、つまり子どもの「死生観」の研究はあまり多くない。教育や医療現場で実践的な介入をする場合、対象者の「死生観」を知ることは重要だと指摘され、平井ら（2000）、細井ら（2001）は死生観を定量的に測定する方法を試みている。子どもへの実践的介入にも、子どもの死生観という基礎的な資料が必要であろう。

本研究では、なかでも先行研究の少ない、中学生の「死生観」を探索的に探ることを目的にしている。中学生は自己概念の形成のために自己が激しく揺れ動く「大人でもなく子どもでもない時期」である。死生観を質的に研究したNoppe&Noppe（1996）は、青年期の前期、中期、後期において、それぞれの発達課題を反映して死の概念や態度に違いがあることを報告している。しかし、日本では東京都立教育研究所（1983）が幼児から中学3年生までを対象に自殺や死後観について、丹下（2002）が中学生から成人までを対象に「死」から連想する言葉を収集しているが、いずれも中学生は他の年代との比較で論じられているだけであり、中学生の死生観を鮮やかに描き出しているとは言いがたい。

本研究では、中学生の死生観の全体像を描き出す中から、まだ詳細に検討されていない側面を発見することを目指した。そこで、本研究は仮説検証を目的とするような量的研究ではなく、「質的研究」のデザインを採用して探索的研究を行った。

ここで「死生観」の定義を述べておく。死を扱う学問「死生学（Thanatology）」は死を迎えるプロセス、ターミナル・ケア、悲嘆のケア、自殺、安楽死や臓器移植など死に関わる多様なテーマへの学際的アプローチである（デーケン、1986）。心理学の分野で研究されてきたのは主に、子どもを対象とした「死の概念の発達」（Nagy、1948など）と、成人を対象とした「死に対する恐怖」（Templer、1970など）であったが、近年、「死生観」は死や生への側面を含め、多面的にとらえる必要があるとの指摘から研究が行われてきている（丹下、1995；平井ら、2000など）。本研究では、丹下（1995）らの定義を参考に、死生観とは「生と死についてどうとらえるかという個人の考え方であり、生と死についての価値、感情、信念などを含む」と定義したい。

倫理的問題と絵本を研究に使用することの意義

本研究の実施においては、中学生に死について問うという倫理的問題を何よりも考慮した。先行研究から、青年期前期に位置する中学生は、自我が揺れ動き、時には死を美化し、死への空想を膨らませることもあることが指摘されている（Kastenbaum, 1992 ; 平林、1986など）。協力者の変化に気を配りやすいよう、予備調査では研究者である筆者と面識がある中学生に協力してもらい、本調査ではデス・エデュケーションを実践している中学校教師に依頼して、その授業を受けている生徒に協力してもらった。

調査では死生観を直接的に問うことを避けるため、

生と死について考えることのできる絵本『100万回生きたねこ』(佐野洋子、講談社、1977) を読んで感想を書いてもらうという方法をとった。質問紙などで自身の経験や感情を直接的に問うのではなく、物語というフィクションを採用することで、自身の死生観を安心して投影することができ、重大な動揺を最小限に押さえられるだろうと考えた。

絵本を使用することの意義はそれだけではない。死生観は死別体験や本人のパーソナリティなどによって左右され、個人差があることが指摘されている(Kastenbaum, 1977)ので、特定の物語を素材として提供すれば、条件を一定にすることができる。既存の物語を使うことで、作者の死生観を押し付けることになるのではないか、感想文はストーリーを書き写すだけにならないのか、という問題があるが、自己の発達の研究において『THE GIVING TREE』という絵本を小中高校生に読んでもらい感想を分析した守屋 (1992) は、「研究者が研究用につくった作品を子ども達に与えても、本気で感想を綴る子ども達の眼に耐えうる作品になるとは考えられない」と述べており、質の高い絵本であるからこそ中学生が本音を綴ってくれる可能性があると考えた。心理臨床で使用されるＴＡＴ（主題統覚検査）やＰＦスタディ（絵画欲求不満テスト）と同じように、絵本を多義的刺激と考えれば、中学生が感想文に自己を投影し、死生観を表現する可能性は十分に考えられる。

『100万回生きたねこ』は、生き方に満足しなかったために100万回生き死にを繰り返した主人公のトラ猫が、100万回目に初めてある白猫に恋をして結婚し、満足な生を送った結果、二度と生き返ることはなかった、というストーリーである。生と死をテーマにした多数の絵本の中でも、1977年の出版以来長く読みつがれ、種村 (1998) などデス・エデュケーションでは盛んに取り入れられ評価の高い絵本である。

死生観にはさまざまな側面があり、多様なとらえ方ができるため、『100万回生きたねこ』という１冊の絵本の感想で中学生の死生観のすべてをカバーできるわけではない。この点は、本研究の限界である。しかし、この絵本を高校でのデス・エデュケーションの実践に導入した古田 (2002) が「読み手の年齢や状況（恋の始まり、恋の終焉、死別や離別の体験等)によって、受け止め方や想像する世界が様々に変化してくる不思議な力を持った絵本」と述べているように、幅広い受け止め方をされる可能性のある絵本であるので、ごく限られた部分しか反映しないというわけではない。何より、限界を設けることによって倫理的に安全な研究にできると考えた。その意味では、本研究では積極的に限界を設けたのである。

方　法

予備調査として、首都圏在住の６人の中学生（男子１名、女子５名）を対象に『100万回生きたねこ』を読んで感想を書いてもらった。この絵本を読むことで死生観を表現してくれるかどうか確認し、本調査用紙の形式などを検討するのが目的だった。2003年５月から６月に実施。倫理的問題をふまえ、面識のある中学生に協力してもらい、協力依頼の電話の際に保護者および本人に「いのちについての絵本を読んでもらい、感想を書いてもらいたい。もし、最近ペットを亡くす体験などをしていたら絵本を読むのはあまり気分が良いものではないかもしれないので、断ってもらってもいい」と伝えた。更なる情報収集のため、４人には追加で面接も行った。

本調査の協力者は千葉市内の公立中学１、２、３年生男女123名（１年生64名、２年生32名、３年生27名)。生と死の授業を実践している教師に、授業中に実施してもらった。調査用紙は、フェイスシート、絵本についての自由記述、自我の発達を見る尺度(７件法)で構成した。自由記述では４つの設問をもうけ、〈質問１〉登場人物を列挙しておいた中から好きな登場人物に丸をつけてもらい、さらに、その登場人物が好きな理由、〈質問２〉100万回生き死にを繰り返した主人公のねこが最後のページで二度と生き返らなかった理由、〈質問３〉絵本の感想を自由に、〈質問４〉続きを書くとしたらどのようなストーリーにするか、書いてもらった。自我の発達段階尺度は、谷 (2001) の多次元自我同一性尺度を使用した。丹下 (1995) で自我が発達しているほど肯定的な死生観を持つと指摘されているため、得られたデータを「中学生の死生観」と一まとまりにして扱うことが妥当かどうかを見るために実施したが、何をもって肯定的な死生観とするのか意味があいまいであることなどに気付いたため、本論では自我の発達得点については考察しない。

自由記述の分析方法

自由記述で得られた文章は、ＫＪ法に基づいて分析した。川喜田二郎が考案した、渾沌としたデータをボ

トムアップ式にまとめあげる方法である(1967)。近年心理学の分野でも盛んに取り入れられるようになった、社会学者のGlaserとStrauss（1967）が開発したグラウンデッド・セオリー・アプローチなどの質的研究方法の知見も取り入れた。

具体的には、①自由記述のデータを意味のまとまりごとに分けて内容に即した名前をつける(評定)、②名前をつけたデータをカテゴリーへまとめる、③カテゴリーに名前をつける、④カテゴリーをさらに上位概念にまとめて名前をつける、⑤カテゴリー間の関係を図式化し考察する、という手順をふんだ。名前をつけてまとめるにあたっては、解釈しすぎることに細心の注意を払い、記述の内容や言葉づかいから判断し、注意深く区別した。名前が適切かどうか、データの内容をよく表わしているかどうかなどをチェックするため、時期を置いて3回以上、見直しを行った。信頼性を検討するため、大学院で心理学を専攻する2名による分析を行い、評定者間での一致率を求めた。その結果、71.0%の一致率を得た。

結果と考察

『100万回生きたねこ』を読んだ感想のカテゴリー化の結果と考察

調査用紙の〈質問3〉にあたる『100万回生きたねこ』を読んだ感想を、意味のまとまりごとに名前をつけてカテゴリーにまとめた。評定数の合計は204。カテゴリー化の結果、一番上位のカテゴリーとして【死】(評定数38、全体の18.6%)、【生と死】(評定数83、全体の40.7%)、【生】(評定数51、25.0%)が得られた。ストーリーの感想に終始していると判断した【ストーリーへの言及】は8.8%しかなく、この絵本の感想を通して死生観が表現されたと考えることは可能であろう。

以下、得られたカテゴリーの中から、本研究で特に注目したい死生観が反映されたカテゴリーについて述べていきたい。

【生と死】（評定数83、全体の40.7%）

（1）【生の一回性、有限性】（評定数51）

生命は有限であり一回しか生きることができないという【生の一回性、有限性】に注目した回答を下位カテゴリーとして分類した。全カテゴリーの中で評定数が最も多いが、主人公のトラ猫が100万回の人生を生きた末にやっと死を迎えるというストーリーの性質ゆえに、このカテゴリーに注目する回答が多かったと思われる。

ここでは、さらに7つに分類した下位カテゴリーのうち、【100万回生きてうらやましい・100万回生きたい】(評定数10)と【一回の生を大切に生きるのが良い】(評定数7)の2つに注目したい。【100万回生きてうらやましい・100万回生きたい】には、「僕がもし100万回生きられたらいろんなことを試したいし、夢が実現するまで生き返る」(1年男子)、というように、100万回生きられたらこんなこともしたい、あんなこともしたいと、さまざまな人生に思いをはせている記述が分類された。一方、【一回の生を大切に生きるのが良い】には、「どんなに何回生き返っても、本当に大切な人生を生きれば一回でいい」(3年女子)というように、一回きりの人生だからこそ大切に生きるのが良いのだ、という考えが表現されている。

3歳から13歳までの死の概念を調査した仲村(1994)らの先行研究から、学童期以降の子どもは命の非可逆性を理解していることがわかっているが、中学生は非可逆性を理解した上で「生は有限だからこそ大切に生きることが大切なのだ」と考える場合もあれば、非可逆性を理解しつつも「もっと生きたいし、生き返りたい」と「生まれ変わり」を願う場合もあることがうかがえる（図1）。

Kastebaum（1992）は高校生を対象とした研究から、ティーン・エイジャーは命が有限であることによって、自分の願望とアイデンティティが実現できないかもしれないことを感じ、未来への計画性を持てないと述べている。この説明が中学生にも当てはまるとすれば「もっと生きたい」と願う中学生は限りある生を自分なりに生きる手立て・道筋を知らないと言えるかもしれ

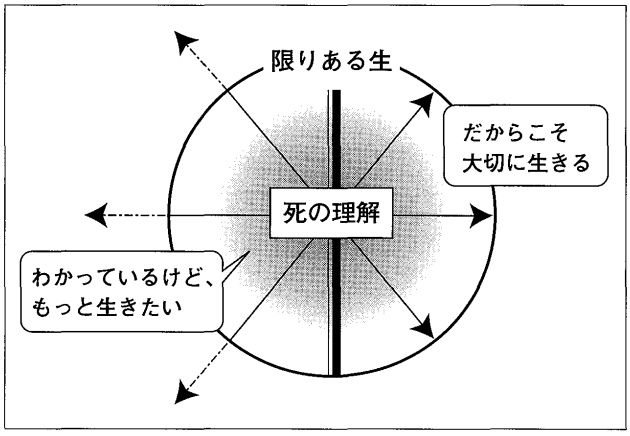

図1　生と死の理解

ない。一方で、「だからこそ大切に生きる」と考える中学生は自分の生き方のイメージをしっかり持っているのかもしれない。しかし「もっと生きたい」と「大切に生きる」に分かれる要因が何であるかは、本研究のデータからはわからない。

もっと生きたいという「生まれ変わり思想」が日本の中学生に見られることは先行研究と一致している(東京都立教育研究所、1983；仲村、1994；杉本、2001)。宮本（1983）は「生まれ変わり思想」が生を軽んじ自殺につながる危険性を指摘しているが、本研究のデータからは、「生まれ変わり」を願う気持ちは「未来に実現したいことがたくさんある」という状態であることが示唆され、自殺よりはむしろ「生き方」や自我同一性との関係で考えるべき問題ではないかと考えたい。

（2）【関係の中での生・死】（評定数32）

「一緒にいて自分が幸せになれる相手がいるからこそ、生きるということが幸せなことになってくるんだと思った」（2年女子）など、愛する人の存在が生きることに意味や価値を与えてくれることを表現している回答が分類された。評定数32は全カテゴリー中で3番目に多い。丹下（2002）は、中学生は成人よりも「関係の中でおこりうる死」の連想反応が少ないとしているが、中学生でも他人との関係の中で生と死を考えることが少なくないことがうかがえる。

「猫はどんな気持ちで飼われて死んだのだろう」（2年女子)、「可愛がった猫が死んで飼い主はかわいそう」（2年男子)というように、飼われたトラ猫や飼い主の気持ちを表現した回答もあり、中学生にとって「ペット」との関係が死生観に影響することも示唆されている。

【生】（評定数51、全体の25.0%）

（1）【生き方のイメージ】（評定数36）

主にトラ猫の「生き方」に注目した回答が分類された。『100万回生きたねこ』の前半、トラ猫が嫌いな飼い主から逃げなかったことに注目し、過酷な状況に同情するとともに「猫はいろんな人が嫌いだった。なのに逃げなかったことがえらいです」（1年女子）というように、嫌いな飼い主から逃げなかったことを肯定的にとらえた回答が見られた。「自分の生き方に満足してなくて、なんかかわいそうに見えた」（1年女子）と、生き方に満足しないことをかわいそうと評価している回答もある。中学生が「生きる」ことを肯定的にとらえ、満足した人生を送りたいという強い気持ちが根底に流れているように思える。

トラ猫は100万回人間に飼われた後にノラ猫になるが、その場面で「ねこは　はじめて自分の　ねこに　なりました。ねこは　自分が　だいすきでした」という記述がある。この点に注目し、自分を好きになることへの共感を示す回答も見られた。自己を肯定することに意味を感じ、自身もそうでありたいという気持ちがうかがえる。

【死】（評定数38、全体の18.6%）

（1）【死に方・死に際についての感想】（評定数14）

『100万回生きたねこ』の前半部分でトラ猫が人間に飼われていたときの感想が多く分類された。下位カテゴリー【残酷な死に方を嫌悪】では、悲惨な死に方への嫌悪がうかがえた。【トラ猫は大切にされて死んだ(評定数5)】では、「どんなに猫を傷つけてしまっても、命の大切さを忘れずにちゃんと土にうめてお墓を作ってあげてやさしい人たちだなと感じました」（1年女子）というように、死んだ後は墓を作る、埋葬するということを大切にする気持ちがあることがうかがえた。また、評定数は1であるが「おばあさん以外は全部飼っていた人のミスで猫が死んでしまってかわいそうだなと思いました」（1年女子）というように、他人のミスで死ぬことにネガティブな感情を持つ回答があった。これは踏み込みすぎた考察かもしれないが、他人のミスで死ぬことへの反感は、生と死の「自己決定権」の問題と関係していないだろうか。死生学においては、患者が受ける治療を自分で選択し自分で決定する権利を尊重すること、自殺をすることは自己決定権であるかどうか、といったトピックスが議論されている(河野・平山、2000)。推測の域を出ないが、自分の最期を人の手によって決められるのではなく、自分の手で自分の生を生きたいという意志が見えるような気がする。

死後観

調査の〈質問4〉では、『100万回生きたねこ』に続きを書くとしたらどんな話にするかを尋ねた。この絵本では最後、白猫が死んだことを嘆き悲しんだトラ猫が、ある日、泣きやみ、「ねこは、白いねこの　となりで、しずかに　うごかなく　なりました。」そして次のページは「ねこは　もう、けっして　生きかえりませんでした。」と書かれているだけで終わっている。予備調査の結果から、これに続きを書くということは白猫

とトラ猫が死んだ後のことを書くことであるので、中学生の「死後観」が表現されるのではないかと推測された。〈質問３〉の感想の分析と同様、ＫＪ法によって分類した。評定数は合計127。記述無しは15である。

その結果、【現世以外で生き続ける】が評定数42、33.1％と最も多かった。【現世で生き返る】は評定数13で10.2％であり、現世以外とこの世を合わせて「死んだ後も生きる」という回答が半数弱を占めた。【生き返らない】という命の非可逆性を現実的にとらえただけの回答は評定数９、7.1％のみであった。

死んだ後も生きるという「生まれ変わり思想」は、仲村（1994）によると年齢が高くなるにつれて増え、日本の特徴であるとしている。杉本（2001）でも死後観のうちの生まれ変わり思想は年齢とともに増え、12～15歳では60.6％を占める。絵本の続きという「ファンタジーの世界」を描かせる上では、生まれ変わり思想が表現しやすい状況だったと言えるものの、先行研究からすれば、本研究で「死んだ後も生きる」が半数近くにのぼったことは不自然ではないだろう。

【現世以外で生き続ける】というカテゴリーの内訳を見ると、天国で暮らす・天国で生きるなど「天国」という表現を用いたものが評定数37で一番多い。「あの世」という回答は２人のみであり、現世以外の死後の世界のイメージとして思い浮かべやすいのは「天国」であると言えるだろう。

【現世で生き返る】というカテゴリーでは、「また生き返る」という回答が評定数11で最も多い。「アレイズする」という回答が１名いる（３年男子）が、これは人気テレビゲームソフトで使われている、死者をよみがえらせる呪文のことだと思われる。子どもの死生観に影響を及ぼす要因として、簡単にキャラクターを死なせたり生き返らせたりできるテレビゲームの存在もあるのではないかという指摘もあるが（水谷、2001）、佐藤・齋藤（1999）のようにテレビゲームの影響はないという調査結果もあり、テレビゲームと子どもの死生観の関係を簡単に論じることは出来ない。しかし、「アレイズする」という回答からは、中学生が生と死について考える際にテレビゲームの世界の言葉や概念を使用する可能性があることは指摘できよう。

今後の研究の展開

本研究では時間的な制約もあり、データ収集と分析を何度も重ねていく「理論的サンプリング」を実施しなかった。また、本研究は『100万回生きたねこ』のストーリーという「文脈」に依存しているため、取り上げることのできた範囲には限りがある。今後は新たなサンプル、新たな文脈を使って、今回浮かび上がった死生観を検証していく必要がある。中学生の死生観の特徴をくっきり浮かび上がらせるために、他の年齢群との比較も今後の課題である。各論的には、生の有限性・一回性の認識と未来イメージや生き方との関係、自己の死と他者の死の違い、死後観のさらなる探索など、さまざまなテーマが考えられる。

研究の振り返り

質的研究では、量的研究よりも研究者自身の価値観や経験などのバイアスが入りやすいと言われることから、研究の最後に振り返り（reflexivity）を行うことが求められる（Holloway & Wheeler, 1996）。

研究者である筆者自身の価値観によるバイアスを減らすことができたかを振り返ると、題材とする絵本を選ぶ際に思い入れの強すぎないものを採用したという意味では適切であったと考える。ラベル付け、カテゴリー化においては『100万回生きたねこ』について書かれた文献（山中、1986；加藤、1998；古田、2002など）を参考に、『100万回生きたねこ』がどのような要素を含んだ物語であるかを慎重に検討しながら、ストーリーに固有の死生観が含まれていることを踏まえつつ、普遍的な意味を持つ死生観を拾い上げるようにした。バイアスが入り込んだとすれば、考察においてであろう。中学生の記述にはつたないものもあったため、感想に表現された意図を読み取ってかなり踏み込んだ考察を行わざるを得ない場合もあった。踏み込みすぎていると気付いた部分については、「踏み込んだ解釈であるが」という断り書きをつけた上で考察を加えている。

本研究は、現実にある死生観を「見つけ出す」という実在論的、実証主義的な立場に立とうと心がけ、データのラベル付けやカテゴリー化において「客観的」であろうと努めた。考察も、先行研究の知見を踏まえるようにした。しかし、「踏み込んだ考察」をしたものについては、社会構成主義（social constructionism）の考え方で言う「特殊な読み」をしたと言えるかもしれない。

絵本の感想という方法ではなく、もっと異なる研究方法で追求することができたかどうか。倫理的問題を考えると、絵本を刺激材料とする研究デザインは意味があったと考える。情報を得るためには面接調査の方

が適切だろうが、面接調査のためには倫理的問題でクリアすべき点が多い。しっかりした面接構造で実施できること、面接後の協力者の変化に気を配ることが出来る体制など、環境が整えば実施することも可能だろう。

文　献

デーケン, A.（1986）死への準備教育　第一巻　死を教える　メヂカルフレンド社　2-5、49.

古田晴彦（2002）「生と死の教育」の実践　清水書院　78-80.

グレイザー, B.＆ストラウス, A.　後藤　隆・大出春江・水野節夫（訳）（1996）データ対話型理論の発見 ― 調査からいかに理論をうみだすか　新曜社（Glaser, B. & Strauss, A. 1967 The discovery of grounded theory. Chicago: Aldine）

平林　進（1986）デーケン, A.編　死への準備教育　第一巻　死を教える　メヂカルフレンド社　98.

平井　啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫（2000）死生観に関する研究 ― 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 ― 死の臨床23　71-76.

ホロウェイ・ウィーラー　野口美和子（監訳）（2000）ナースのための質的研究入門　研究方法から論文作成まで　医学書院　（Holloway, I. & Wheeler, S. 1996 Qualitative Research for Nurses ; Blackwell Science Ltd., Malden, USA）

細井　順・川邉圭一・川原啓美・平井　啓（2001）ホスピス患者の死生観　死の臨床24　58-61.

金児暁嗣（1994）大学生とその両親の死の不安と死観　大阪市立大学文学部紀要46　537-564.

加藤久美子（1998）たった一回生きるために ― 佐野洋子『100万回生きたねこ』論　学芸国語国文学30　149-153.

Kastenbaum, R. 1977 Death and Development through Lifespan, in: H. Feifel (ed.) NEW MEANING OF DEATH (New York)（引用は、竹田純郎・森秀樹（1997）「死生学」入門　ナカニシヤ出版）

カステンバウム, R. 井上勝也（監訳）（2002）死ぬ瞬間の心理　西村書店（Kastenbaum, R. 1992 The psychology of Death, 2nd edition, New York: Springer Publishing Company, Inc）

川喜田二郎（1967）発想法　創造性開発のために　中央公論新社

河野友信・平山正実（2000）臨床死生学事典　日本評論社

水谷めぐみ（2001）子供に死を教えるということ　看護53(5)　110-113.

宮本一史（1983）死の意識（稲村博・宮本一史・宮本裕子・増田陸郎）共立出版　72-84.

守屋慶子（1992）「ファンタジーの世界」の生成過程にみられる認識発達の一側面　立命館大学525　177-202.

Nagy, M. 1948 The childıs theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73, 3-27.（引用は荻野美佐子・井手野由季・稲本絵里・北村幸恵・大谷保和・佐藤亜紀・田中美早・山田浩子　1999　身体・病気・死の概念の発達　上智大学心理学年報23　33-52.による）

仲村照子（1994）子どもの死の概念発達心理学研究5(1)　61-71.

Noppe, I. C. & Noppe. L. D. 1996 Ambiguity in Adolescent Understandings of Death (Corr, C. A. &Balk, D. E. 1996 Handbook of Adolescent Death and Bereavement: Springer Publishing Copmany)

佐野洋子（1977）100万回生きたねこ　講談社

佐藤比登美・齋藤小雪（1999）現代の子どもの死の意識に関する研究　小児保健研究58(4)　515-526.

杉本陽子（2001）子どもの「死別体験」「死後観」「死のイメージ」― 慢性疾患患児と健康児への面接調査による比較検討　日本小児看護学会誌10(2)　22-30.

種村エイ子（1998）「死」を学ぶ子どもたち　知りたがりやのガン患者が語る「生と死」の授業　教育史料出版会

丹下智香子（1995）死生観の展開　名古屋大学教育学部紀要42　149-156.

丹下智香子（2002）「死」からの連想語のＫＪ法による分類 ― 死生観の構造の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　49　157-168.

谷　冬彦（2001）青年期における同一性の感覚の構造 ― 多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成 ― 教育心理学研究49　265-273.

Templer, D, A. 1970 The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology* 82 165-177.

東京都立教育研究所（1983）子供の「生と死」に関する意識の研究

山中康裕　1986　絵本と童話のユング心理学　大阪書籍（引用・参考は、ちくま学芸文庫による）